

## 「流罪から 800 年」

講師 金子正美 師

(2007 年 10 月 浄願寺報恩講法話)

どうも今日は。お正信偈を読んで汗をかく人と、これから何を話そうかと思っ  
て冷や汗をかく汗とはずいぶん違いますよ。私も今実感しておりますけれど  
も。えー、報恩講「流罪から 800 年」という講題を出していただきながら、  
今あらためて何というんですかね、朋、同行という言葉がありますが。あの、  
友人、あるいは縁が有って会えた人という事に対してですね、何かすごく有  
り難いなあという思いを持ちながら、最近お話をさせて頂く事でございま  
す。

報恩講、御正忌という話が出ましたが、西本願寺・東本願寺と本願寺が 2  
つありますけども、何故か御正忌（御正当）も 2 つあるんですよ。不思議と  
思われるかも知れませんが、東本願寺は 11 月 28 日が御正当。西本願寺は 1  
月 16 日を御正当とこういうわけですよ。これは何ですか、本願寺が分かれて  
きて東本願寺を作ったので、あの同じところと一緒にするわけにいかないと言  
ってですね、改めて日を作ったのか、そんなことはない。これカレンダーで  
すね、新暦と旧暦というのがありますよ、私たち大谷派は旧暦を使い、向  
こうは新暦を使うということで、1 月 16 日が御正当ということがあります。

私の住んでいるところのすぐ近くに——新しく上越市になりましたが——  
「牧」という所があります。少し行くと長野県という県境の村であります。そ  
の、山——そこのご本人は山とおっしゃいます——にお西のお寺がありま  
して、1 月 16 日の御正当の頃は必ずそこにはブルドーザーが入るんです。  
何故そこにブルドーザーが入るかということ、雪をどけるためにブルドー  
ザーが入るんです。高田の街、高田の私の住んでいるところで 1m、「わー大  
変だ、1m 積もった」と言ってる時は、その牧では大体 2m 半くらい積も  
っています。他の用事で行く機会がありましてですね、こんもり山になっ  
ている雪がありますので、「ブルドーザーの跡があるんだねー」と言いま  
したら、住職が出てこられてですね「やー、やっと本堂の前を開けることが  
できました」と言ってですね、そのブルドーザーの説明をしてくださった  
事があります。まー、そんなにして報恩講を勤めるということですね。そ  
の寺の場合は、どうしても御正当、御正当ということ、昔からお寺さん  
も思い、地元も人も思いですね、雪をかき分けてもとにかく本堂でお参  
りをするという習慣が残っている所です。私達はそうやって報恩講を勤  
めるということは大事な事だと思います。思いますが、しかし一方から  
言えば、本願寺にお参りすることを先ず一番先に考えましてですね、本  
願寺に行く前に報恩講を勤めて、それから本願寺へお参りしましよ  
うという考えがあっても良いですね。そういうことを何と言うか、先に  
引き上げてお参りしましよいう、「お引き上げ」の法要というものを報  
恩講としてお勤めいたします。それから本願寺へ行って来てですね、「あ  
ー、今年も行けたね。行くことが出来ましたね」という喜びながらで  
すね、そこを通りこして報恩講として勤まってい

「ごしょうとう、ごしょうとう」と言いますので、いろんな字があるん  
ですけども、御正当、正に当たっているという意味ですね。御正忌と書くこ

ともありますね。で、その日ではなく前にやる、前にお参りすること。ということはですね、あのおそらく、私の想像ではまあ、地域の事情はもちろんありますけれども、1つには、蓮如上人のお話をお聞きなられた越中の赤尾の道宗という方がですね、たしなみ、たしなみということを経験から学ばれてですね、1日、1月、1年のたしなみという事を言われて、それを喜ばれて『蓮如上人御一代記聞書』というところにも繰り入れられている言葉があります。それはこういう言葉なんですね。「1日のたしなみには、あさつとめかかさじとたしなめ。1月のたしなみには、ちかきところ、御開山様の御座候うところへまいるべしと、たしなむべし。1年のたしなみには、御本寺へまいるべしと、たしなむべし」とこういうふうには、1日それから1月、1年というふうにはですね、そのようにして生活するんだということをそこで述べられているわけです。で、その話はまたの機会にしたいと思いますが。

今日用意をしてまいりました、1番最初に申しましたとおり「流罪から800年」。1207年に、法然上人が四国、親鸞聖人が越後ということで、流罪に遇われたわけです。法然上人は土佐ということになっておりますが、本当は讃岐だそうです。越後の場合は、どうも今の場所だという。ただ「国府」という場所が今の場所なのかどうなのかという疑問は付きます。もう一つ国府という場所が、海岸ではないところにあるそうですけれども。多分そこだろうと言われていたところに着かれてから800年ということですね。私はこの事を数年前からですね、京都に行く機会のある人達といろいろ話をする中でですね、いろんな用事で京都に行くわけですが、その時に。例えば、本願寺でお朝事が勤まった後にお話される方とですね、あるいはまあ機会が有る度にですね、流罪、流罪と言いましょかということですね。まあ申し合わせみたいな事をしてきたわけです。

教団は2011年に750回忌を迎えるということで、そちらの方に向けてですね、いろんなことが行われております。瓦の吹き替えとか、御影堂の修復とかですね。それはそれで、何もそんなことする必要はないと言うつもりはありません。しかしちょっとこう考えてみるとですね、800年前にこういうことがもし起きなければ、まあ朝廷の言うとおりに、あーそー、じゃあそういうお念仏を止めましょかということですね、法然という方も、その当時の善信という方もですね、お国の方でそう言われるなら、我々はそういう野暮なことは止めましょかということになれば、おそらくこの事件は起きなかったわけですね。で、その事件がもし起きなかったならですね、750回忌云々と言っておりますけれども、そういう東本願寺とかですね、真宗大谷派とかですね、もっといえば浄土真宗という宗旨ですらおそらく日本には起きなかったという事実がある。そしてもっと大事な事は、あの高田の別院の法要の時、皆さんお見えになった時に私もお話したと思いますが、後に親鸞と名告る人すらですね、おそらく出てこなかったであろうということが言われているわけですね。どういうことかということ、当時の記録を見ておきますと、この流罪以降愚禿釋親鸞と名告るとこうあるわけですね。ですからこれ以降親鸞と名告られたわけです。そういうことも無かったということに気を向けていかないといけないのではと思うわけです。そして、何故そのような流罪という、あ

るいは死罪というものが起きたかという事です、これは詳しい事は言いません。あの分からない事もありますし、時間もないこともありますけれども、10月に来てくれた私の友人の説がかなりきつと思うんですが、ま一色々あるわけだけども、結局後鳥羽院という天皇に仕えていた2人の女性が出家したということがですね、糸口になったという事はたぶん間違いないと思うんです。で、何故その2人の女性が出家するまでに至ったのか。あるいは何故出家をするまでに、その法然上人の教えに感じ入ったのか。そういうことを少し考えてみる必要があるのではないかと、彼は言い残していきましたけれども。そんなような事ですね、800年前にそれが起きて、その事ですね、どういうふうになるかは分からない念仏停止、停止と書いてチョウジというんですけれども、止められてですね、何人かが首をはねられて、そして流罪にあうと。そういうことを通してでも尚、お念仏というものがここに伝わったということですね。非常に大事な事ではないかなあと思っているわけです。800年前にそれが無ければというお話をしましたけれども、その800年前に起きた事をご縁としてなんと私のところにまでですね、お念仏が届くということはですね、一体どういうことなのか――。

よく、報恩講って何ですかと聞かれると、これは親鸞聖人の法要ですとお答えになる方があります。親鸞聖人の法要が報恩講であります、そう、そうなんでしょう。で、それを自分のところに引き寄せて考えてみますと、まあ千葉県の方は分かりませんが、私達のご近所のお話を聞いておりますとですね、まあ自分の親の法要は分かります。いろいろ苦勞かけたり、色々しましたから親の法要をする事は分かる。その上祖父母、おじいちゃんおばあちゃんの事もまあ、小さくてわからない時だったけれども何か家にいっぱい人が集まってきてざわざわしていたなあということが分かる。ところがその先になるとですね分からないというようなことがあってですね、こういう人の法事しないといけないのかねーと、こういう話題が出るわけです。ところがその先まで行かなくてもですね、おじいちゃんが亡くなった頃に小さかったその子供のところに連れ合いが来る、結婚する事がありますね。そうするとですね、私がそろそろおじいちゃんの法事の時期だなあと思っておりますとですね、こういうんですよ、「嫁さん来たけど、嫁さんの来る前に亡くなった人の法事しなくてもいいよねえ。」とこうなるんですよね。顔の知らない人の法事したってしょうがないでしょと、こう仰るわけです。しょうがないか分からないけれど、ああそうなのとつい言ってしまっ。「ところで親鸞聖人750回忌といけど、あんた親鸞聖人の顔覚えてるの？」って私言ったんです。「そんなこと分からない。そうそうそう言えばお寺さんてずるいよね。顔の知らないような蓮如さんだとか、500年だとか言って法要するのにね。お参りしろと言ってお金集めたりしてますよねえ」と言われて、ずるいずるいと仰いますので、「いやあ、私は別にずるいとは思わないけれど」という話から、こういう話をしております。顔の分からない人の法事を勤めるということはどういうことか。どれほど、この家にとってその人は大事な人だったんだというふうに、親御さんから聞かれた、あるいはその親御さんから聞かれたということをごどこかで聞いた事があるということであればですね、私はその方の100

回忌でも 150 回忌でも勤めたらいかがですか、という風にですねお話しした事があるんですね。それはどういうことかという、先程言いましたように 800 年前に起きた事をご縁として私のところにまでお念仏というものが伝わって来ているという話をしてきましたけれども、その顔の分からない人の法事を勤めることによってですね、その時いなかった人が縁あってそこに居られるわけですから、じゃあこの人はこういう人だったんだよとそこでですね、お話をします。そして、生まれてきた子供さんにもですね、この人はこういう人だったよって言ってね。というふうな事ですね、単純な話をしますとね、そういうことがこう伝わっていくということがあるように思うんですよ。ところがどうもそうじゃない部分も或るわけですが、何かもうそんなのいいやみたいですね、そんな事になっちゃうとちょっとおかしい事になるんじゃないかなと思っております。

さて今日はですね、いろんなことを思いますけれども、特に法然上人から親鸞聖人がどんな風にお話をお聞きになったのか。それがたまたま、時を経てですね、親鸞聖人から数えて 8 代目という時に蓮如上人という方が現れてですね、もう一度親鸞聖人の教えというものを問い返さねばならんというふうな事になってですね、そしてそれから今 500 年、その人が亡くなって今 500 年少し経っているわけですね。今から思いますと、私達が生まれるちょっと前に 100 年という、まあ計算をしますとですね 100 年、もうちょっと前でしょうか、清澤満之という方がお出になりましてですね、蓮如上人が「これは確かに信仰の本としては大変な本であるから、やたらに人に見せたら危ないよ」と、封印された書物が浄土真宗には伝わっております。何かという事ですね、歎異抄という書物は、親鸞聖人のすぐ近くに居られたであろうと思われる唯円という方が書かれたということになっております。その文章をこう見てですね、——特に終わりの方から読むということをして最近覚えたんですが——何故、何故この歎異抄という書物を読まねば、書かねばならなかったのかというふうな事をですね、いろいろ見ていくとですね、要するに私はこういうふう聞いてきました、私はこういうふう聞いてきたというのが何人か寄せられますとですね、そのうちにそれは違う、それは違うということに多分なるでしょうね。そうすると、いやそんなことは無い、こんなことは無い、と言いつつですね——歎異抄の中に出てくる文章なんですけれども——その相手を言い負かせようとして、相手を言い負かせんが為に親鸞聖人が言われなかったことを、こういう風に聞いたんだというふうなことが起きてきたと。これは非常に由々しき問題であるということですね。自分はそれほど専門に仏教を勉強したわけではないけれど、親鸞聖人にお聞きしたことをですね、本当にこう、思い出し思い出しながらですね、その自分が千分の一という事ですね、ちょっとした事でも思い出しながらこれを記すことによってですね、何とか親鸞聖人のことを伝えて行きたい、伝わってほしいという願いのもとに書かれたのが歎異抄だという風に、ずーっと終わりのほうに書いてあるんですね。で、それからまた何年か経っておるわけですから、蓮如上人が亡くなって 500 年経ってですね、そしてその思いを新たにされた方がたぶん清澤満之という方であるとすればですね、蓮如上人が封

印されたものを公にされた。そして今は、歎異抄、親鸞ブームということですね。いろんな書物が出ておりますけれども、まあどうなのでしょう。歎異抄の書物がいっぱい出ているから、歎異抄を読まれている風に見る向きもありますけれども、数多く出れば出るほどますますその意味がですね散乱をしてしまうということだって言えるような気がいたします。

では改めて、何故そういうことを書かなきゃならなかったかということですね。私が思いますのは、「私はどのように教えを聞いてきたのかな」ということをですね、言わば振り返ることから始めることが大事なのではないかと最近になって思うようになったんです。それで今日用意しましたところで、報恩講とは親鸞聖人のご命日を縁として自分の生き方を振り返る、門徒にとって一番大事な仏事という風な。文章にも書いておきましたけれども、門徒にとって一番大事な仏事という、大事なことというよりも仏事。先輩たちのおん仏事という、御という字をつけてですね報恩講のことを語っておられます。この仏事ということが何故出てくるかということ、ちょっと歎異抄の話をしましたけれども、歎異抄の書物の中にですね、真宗とはどういう、浄土教とは一体どういう教えなのかという教えがありまして、「本願を信じて念仏申さば仏になる」とこう書いているわけですね。本願を信じて念仏申して仏になるというのが、法然上人の教え。それを引き継いだ親鸞聖人のお言葉であるわけですね。「仏になる」こうなるわけですね。最近ある方がですね、念仏というのが仏になる教えなんだということを言われてですね、ある所でお話をされた後でですね、「皆さんはそういう教えを聞きながら、あるいはそういう教えをここにお聞きになりに来られているかもしれないけど、皆さんは仏様に早くなりたいですか？」とこう問いかけられた。それまで「念仏申して仏になる」と聞いて、うんと頷いていた方がですね、早く「ほとけ」になりたいですか？と言ったら、ふっと見上げてですね手を振られた。こんなことをお聞きしました。私も人まねですが、同じことを昨日のある会場でその話をしました。一番目の前にいる方が「いやいや私はまだ仏様にはなれません」。「何故ですか？」って聞きましたら、「ととてもとてもあの一、心には悪いことをし、人には意地悪も時々するし、ととてもとてもそんな、仏様の心には成れません」ということで、まあ仏様に成りたくても成れませんというようなことですね。ああ、この方は少しお聞きになっている方かなと、こう思って聞いておりました。今のような話がですね全く無かったかということ、やはり歎異抄という書物の中にも出てくるんですね。それで念仏申せば仏になるという教えを確かにお聞きして、感動してですね、まあ難しい修行をしたり、あるいはなにをしたりということなく、ただ念仏したら仏様になれるんだよと、僕らも浄土に生まれるんだよということを聞いて、確かに喜んだんだけど、しばらくするとですねその心が失せるとこういう訳です。仏様に早くなりたいと思わない。そして念仏しても何か喜びが沸かない。どうしたものかとかうおたづねになる場面がある。で、昨日のあるお寺でですね、そういうときに親鸞聖人はなんて仰ったと思いますか質問したんです。そして、「修行が足りないなあお前は」とこう言われたのかと思われる方と言ったら、かなりの数の手が挙がるんですよ。手が挙がるんだけど、その様子を、

こう手が挙がる人の顔を見て居るとですね、確かに歎異抄学習会等で学ばれた方なんですけどそのところに書いてあるのは読んでいるようで読んでない。修行が足りないってこう仰たんなら、すいませんと言って、またじゃあお念仏の修行を一から出直してきますとなるでしょうけど、どうも親鸞聖人はそう仰ったのではないような気がするという事をちょっと言いますとね、色んなことが思い起こされるわけですね。そうするとまあ言葉としてはですね、「親鸞この不審ありつるに、唯円坊お前もか」ということですね。出てくる場面があるんですけども。これをですね、そのまんま私のところに引き受けてですね、親鸞聖人もそうやって念仏勧めながら念仏を喜ぶ心が無かったんだから、私も別にそんなこと喜ぶことなからうという風に思うのはですね、ちょっと早すぎるんです。

その前に、まず信心と言いましたけれども、今これは信仰問答ですから信心というのは一体何なのかということが自分のところでちゃんと受け止めて頂かないとですね、(単に人の問答だけではない事を言いたいわけですけども)信心の話なんです。信心の話。これをですね、あるいは信仰と言ってもいいですが、法然上人、親鸞聖人のことをお話してはいますけれども、そこに一緒に教えを聞かれた聖覚という方がですね、我々にとっても大事な聖教である「唯信抄」というものを著された。この聖教を探ってみますとね、今みたいなことが書いてあるんですよ。問答の中に。お念仏お念仏と言うけれども、お念仏というのはどんな功德があるのか。あるいはいつ称える念仏が一番功德があるのかとか問答がある。お念仏には功德が付いているけれども、その功德が分かるのはいつなのか?。いつだと思えますか、皆さん?今ですか?いつでもですか?いつでもなんでしょうけれどもはっきりそれが分かるというような、私にそう見て取れるのは、そういうことに取れるわけですけども、何にもまして何処に功德があるかと言うとですね、臨終の念仏というのが一番功德があると書いてある。臨終の念仏。臨終とはいつの事ですか?誕生のことですか?臨終って一番うれしい時ですか?「やったー」なんてこういうときではないですけども、何故臨終なのかなと思うんですが。まあ私が素朴素朴という意味はどういう意味かといわれますけど。私の思う素朴な思いとしては、臨終ということに、そこに立ち会うようになりますとね、思わず手が合うんですよ。臨終ってそういう効果があるってことですね。お念仏に付いた功德じゃなくて、お念仏についての功德が臨終という形をもったときに初めて現れるということだと思っただけなんです。それを読み進んでいきますと、信心のおこりやすきとき、と出てきます。どんなときに信心がおこりやすいのか、どんな時に自ずとおこってくるのかということ、また素朴なことに成りますけれども、私たちは信仰とかですね宗教とか言うと心のことばかり言いますけれども、実は心とともに身を持つ存在だということをやっと忘れることがある。ありますね。身を生きるものである。心は何処にあるか分かりませんが、身は姿を変える。分かりますよね。そんなことは無い、私は生まれてからこの姿という方いますか?いませんね。どういふように変わるか。読んでいきますと、その身おだしき時は。おだしき時はとは、穏やかで心も気持ち平らなときは、医者(くすし)、陰陽師(おんみょうじ)、

おそらく医者とかです。宗教者の言うことはぜんぜん耳に入らない。800年以上前の書物なんですよ。

ところが身の病というのが、病重く命せまりてとこうあるんです。病気になって、それが重くなって、何となく死が近づいてきたなとこう感じる頃になるとですね、口に苦き薬をも服するようになるし、痛き療治も受けるようになる。これは苦いけれども病気に効くということになれば飲む。あるいはちょっと痛いかもしれないけれどもこれをやったら治るかもしれないよと医者に勧められたら、その治療も受け入れるようになるかと書いてある。周りに対してはどうかということですね、祭壇を作りますと、このような祭壇を作って一生懸命拝みなさいと言うんですね。そうすると祭壇を作ってこれを祈らせてこう言われたらですね、命が延びると言ったら、人は力を尽くし宝を惜しまず、飾り祈るとこう書いてある。力を尽くしてというのは、もうそれこそただ生きていて欲しい、一生懸命祈るとこう書いてある、800年前の書物に。それは、何とか命延べさせんためとて。何とか生きて欲しい、生き延びて欲しい、という思いがそうさせると書いてあるわけです。ですが、残念ながらここを逃れた人は誰もいない。誰もいないんですね。そこをどう受け止めるかということ。だから延びることが悪いとか云々ではなくて、一生懸命生きんが為に、生きんが為に。あるいは生かそう生かそうという思いは一体何なのかなということ、言いたい訳なんですけれども。それも、人は病になつたりしないとなかなか分からないと。で、老いというのは、歳を重ねると考えてください。何も老人だけではありません。歳を重ねていく、歳を重ねるということはどういうことかと言うと、後戻りが出来ないということなんです。あ、しまった、あの時あーすればよかったと言ってもですね、後戻りが出来ない。20代の時もっと勉強すればよかったって時々思うことがあります。そう思って子供に言うことですね、親も出来なかったことが子供にどうしてそんなこと言うのと怒られますけれど、考えてみれば勝手なものです。俺は勉強しなかったけどその分お前は勉強しろとは、本当に勝手な話だと思っただけなんですけれども、そういうことを平気で言うようになるんですね、親というのは。で、後戻りが出来ないということにたいして、じゃあどう思うのか。後戻りできないですよ。私は来年1つ歳をとると、まあ1つ、10の位が1つ増えるんですけれども切ないですよ。本当に切ないけれども、しょうがないですね。若い若いと思っただけでも子供は30過ぎていますから、私はとても来年歳が変わるといっても、1つ10の位が増えるといっても来年40といっても絶対うそと分かりますからね。まあ、だけどころ生きておる。で、その中であってですね、本当にあの、自分が生きてきて生まれてきて良かったということが何処で言えるのかということ、後戻りが出来ないとか、あるいは病気をしなければ病人のことが分からないとか思っている中から出てくるものだと思うんですよ。まあ、私事になってちょっと気が引ける部分もありますけれども、私には兄がおりましてですね、その兄が30で結婚し、3年後に奥さんが亡くなっちゃったんですよ。で、子供が一人いたんです。その子が34になったんですよ。その子はね、産んでくれた母親の顔知らないですよ。けれどもこう生きてきてですね、生きてきたんだけど。一生懸命周り

はね、うちの母親もそうですけれども、「あんたのお母さんは昔こういう人だったんだよ」と写真を見せるんだけれども、片方は何にも分からないわけ。分からんことはないでしょといっても分からないんですよ。そうでしょ。だけれども生まれてきたことは間違いない。そのときの話を思い起こしますとですね、同じように奥さんを亡くした友人もそうだったらしいですけれども何て言うんですかね、周りは無責任。「あなたのお兄さんはまだ 30 なんだから、近くきつと再婚するから。再婚の話になったら子供は邪魔だよ」とこういうんです。だから「親の顔の分からないうちに何処かにあげてしまいなさい。子供のほしい人はいるんだから。特に男の子だからね、ほしい人もいるだろうから早くあげてしまいなさい」と言うんですね。「イヤー、そんなことは出来ませんよ」「そんなこと出来ないって言ったってね、後から後悔するから。私の言うことが必ず正しいと分かるから」と言うわけですね。しばらくしてですね、そちらの方のお母さんが昨年ですか 90 歳で亡くなりましたけれども、その彼が何年か前に来た時ですねこう言ったんですね。「母親の顔は分からないけれども、いつでも周りに誰かいた。例えば私とかですね。それだから今まで居られたんだ」と話して行ったそうです。そういう時にはやはり、例えばおじいちゃんおばあちゃん、ありがたいなと思う気持ちが出るわけでしょう。だけどそんな環境に居なければ分からないのかといえ、そんなことではないと思うんですよ。親の有難さというのはそういう人間じゃないと分からない。これはまた違うんですよ。それから予定の無いことが起きるということは、そこで教えられるわけでしょう。それは冗談では、結婚する時にこの次はあなたも来てねという。誰かにこうお祝いに来いと言ってですね、いうことは有りますけれども。死に別れることなんて予定になんか入っていませんから、そういうようなことをしながら尚且つ生きてて良かったということが言えるかどうかということを、実は私に言われているんだらうとこう思うときがあるわけです。

話が横に行ってしまいましたので戻します。まず最初にですね、信心の話をしてますが、この信心というのは親鸞聖人のまあ解説によりますと、真の心と言われるんですね。真の心というのはね、どういうことかって言うと、自分にとって都合の良い事も悪い事も全てちゃんと受け止めてくれるっていう心のことだと思えます。で、前にも書きましたけれど、信心とは人が言うことが分かりますよね？人偏に言ですからね。これを受け止める心。こういう心が私の中を探してみたら有るか無いかということのをちょっとやってみたんだらうと思うのです。親鸞聖人に会われた方がね。そしてこういう心が無いんだということが分かってくるわけ。これは何かと言うと、これは仏さまの心なんだということですね。で、我々の心はどういうものかというのですね、心から心からと言うけれど、実は私には煩惱というものがあってですね、そして煩は身をわずらわし、悩は心をなやます、とこう説明されてありますけれども。どうもこういうものが無いという時に、私の煩惱とこう考えるんですね。まず考えたとしましょう。すると私の都合の善い事も悪い事も、ちゃんと聞けるようような仏さまの心を頂かなくては信心を得たとは言われませんよ、という教えを聞いたとしたらですね、何とかその心に近づこうと

するわけです。まじめだから。ところが人間の心というのはころころ変わるので、その時その時で変わって行ってですね、そのときは良い人だところ思ってもですね、良い事だと思っても同じことをまるで反対の事として考えることがありますよね。このようなことを繰り返しているとね、まじめに考えてる人はこのことで悩むんですよ。どうしてこうなんだろうか。どうして私の煩惱は私の思うようにならないのか、と考えるんですね。ところがちょっと角度を変えてみるとですね、これは有る人の話を聞いてヒントを得たのですが、そうではなく私ではなく、煩惱の私。実は私というのは煩惱でしかない。煩惱でしかないんだ。例えば何かをやろうと思ってもですね、他人に何か言われてすぐ変わる。この人は良い人だと思っていたものが、こんな人とは思わなかったということにもなる。煩惱の仕業ですね。煩惱の仕業だと思ってしまうようになる。そして煩惱を持ったものを、備わったものを凡夫というんですね、凡夫。こう言います、これはただ人という。ただの人、こう親鸞聖人が説明しておられますけども、末は博士か大臣かといったけれども、20 過ぎたらただの人です。その、ただの人ということがどういうことか。凡夫というのはですね、人間の感情としては、多分誰でも話しをしていると思うんですが、子供が可愛いとか、孫が可愛いとかね、子供には何かしてほしいとか期待をかける思いを持った人。凡。夫はそのために病気したくない、死にたくない、何とか孫が学校に行くまでは元気でいたいと思う人。凡夫。誰でもそうです。そうです。そんなこと言ったっていつか死ぬよなんて思っているのが、何処かに居るんじゃないんですよ。そう思っている自分がコレ(凡夫)なんです。だけれども何とかこうしたいと思っている。何とかしたいんだけれども、どうにもならない。どうにかしたいというのが私たちのこの中身なんですね。何とかやりたい、何とかしたい、だけれども何ともならない。何ともならないけれども、放るわけにもいかない。放り出しても附いて来るといふものを抱えながら生きておってですね、そしてなお生きていて良かったというものを自分の中に見つけることが出来るかどうか。ちょっとでもちょっとでもいいから生きていて良かったと思える人、思える時があった人は、どんな時かということをやっと振り返って頂きたいと思うんですよ。良かったところ思うことをね。

昨年のことですが、自慢話になるんであまり言わないようにしているんですけども、私の所に3人娘がいましてね、一番上のが結婚したんですよ。今までお寺に背を向けていたんですけど、何故か結婚した相手が、「俺一緒に寺やるから」と言い出したもんだから、本人お寺に入らざるを得なくなっちゃって。簡単に言うとね、多分あんまりそんなかっこいいもんじゃないのかも知れないけれど。その子供を見ていて思うことは、あのそういうことですね、お寺に入ってきたわけなんですけど、色々なことを思っただけで入ってきたと思うんです。そのことが、どういう風に変わっていくか。お寺をやることになったのですが、それが今度、お寺がいやだと背を向けていた者がですね、お寺の方へ向いてくるとですね、今度変わっていくんですよ。かたや今、工藤さんが出られた学校に行っておりますけれども、長生きしようかなと。だけれども一方でこの暑さから、こうガタガタって来ましたよね。9月初めに

風邪引いたみたいなんです。のどが痛くて、物を食べると引っ掛かる。痛いんです、飲む度に。飲む度に痛くなる。水飲んでも痛いんですね、唾飲んでも痛いんですね。俺は酒を止めて、今休んで、長生きしよう。この機を境にして酒抜きしようと思ったんだけど、のどが痛いだけでちょっと変な病気じゃなかろうかと思うようになるんですね。そしたら酒飲んじゃおうかと一瞬思いましたけれども。こう風邪みたいで。そんなことのように、ゆれる、ゆれる。これが煩惱なんですね。ゆれるということを知ってくれるのは何かというのが、一本あるんですね。もう一度くどいようですけど考えていくんですね、どうも仏法というのは煩惱のあるところに用らくということのような気がするんですね。ですから死にたくないというのは、皆さん持っている気持ちですけども、病になるまでは思わないですね。だけれども病が重くなってくると、意識するようになること、気付かせるものは何かというんですね、仏法という気がするんです。教えというのは特別というのがあってですね、この教えが大事だから大事にきなさいということだけでなく、私達が教えを仰ぐということはどういうことか。その教えが私の上に用らいているということを見つける。教えを大事に大事にして、何処かにしまい込んでですね、これは大事なものといって仕舞い込んだんでは教えにならない。今現に用らいているというものを実感しなくちゃならない。それは最も本当のことだということ。何とかしたいけれども何とかならない、何ともならないけれども何とかしたい中で、今どうなっているかということを受け止める。今自分はこうだと受け止めることが出来れば、おそらく立っていけると言うんですね。

私達がお念仏をして助かるということがどういうことかといえば、まあこれも大分言いましたが、私は今素朴に思うことは、やっぱり聞いてくれる人がいるということだと言うんですよ。私の話を聞いてくれる人がいる、あるいは私の姿をちゃんと見てくれている人がいる。いつでも傍に誰かがいるものですね。そう思っているいろいろな聞いてきた色々な話を反芻してあげたら、ある方はですねえらく乱暴な言い方するなと思って聞いていた時期もありましたけれども、阿弥陀様は何処におられるのかなというお話をされた方が、前にお話をしたと思いますけれども、どうも阿弥陀様って言ってですね、阿弥陀様をお願いをする時に「苦しくて苦しくてどうもなりません。どうか苦しくない所に連れて行ってください」というふうに思っていますねお念仏することはないだろうか？そしてお念仏する仕方によっては何か楽なところへ連れて行ってもらえるような思いをもってはいないか。しかしそうではないとその先生は仰います。「苦しいなあ。なんまんだ仏」といったら、「苦しいか。大変だな」ってこう即答してくださるところにおられる。何処というところね。地獄の底。世の中には地獄で仏という言葉があります。私は、仏法は煩惱のあるところに用くと言いましたが、仏さまの遇うところは地獄以外にないんです。

仏様の国に行ったら仏様しかいないんだから、どの人が仏様か分からない。私達は少なくともこの苦しさをどうしたらいいかとか、悩みをどうしたらいいかということ、ここが悩む場所なんだということですね。その中でなければたぶん仏様は現れてこない。そうしていてですね、私達は今浄土真宗と

言われているものを見ると、お釈迦様がお経を説かれてですね、この方が説法された、老病死を見て世の無常を悟る。老病死は身の変化の形である。その変化は一様でなく、代わってあげることも、代わってもらうこともできない身を生きている。法然上人はどこかで気づかれたような気がするんです。その教えをお聞きになって、親鸞聖人はまさしくまさしくその通りだと。仏教をいくら聞いても読んで分らないものが、分かる。人間というものは、親子というものは、関係というものは、こうしなければならないあせねばならないと聞いておっても、自分の親が歳をとってきて動けなくなってきたときに、自分はどういう動きをするか。頭の中には立派な事いっぱい入っているんですよ。自分を生んでくれた親なんだから、大事にせにや、当たり前のことなんですよ。だけれども目の前で親が動けなくなったとしたら、どんな動きをするか、あるいは動きをしてきたか。もう人に訊ねることはない、私を見れば分かります。力尽きたくない時もあります。あるいは何かこう言いかけてですね、口が利けない様子を見てですね、昨日一昨日もそうだったんですけども、「俺明後日千葉へ行くんだよな、もう悪くなるなよ」と言いたくなる。悪くなるなら千葉から帰って来てからにしてよ、と思いますね。千葉から帰ってきたよと言って悪くなったらどうなるかという、何で今頃悪くなるんだと言うわけですね。俺がいなくなった時にやってくれればいいのに、ということを手勝手に思うわけですね。それを見たらね、何も悪いことしていない、何も法に触れることもしていないといったって、自分の子とがですね善人だなんて言えませよ、私はね。そこから仏法を聞くことが始まると私は思うんですよ。そのことを親鸞聖人たぶん仰ったんだらうとこういうんですね。私は法を聞くということはどういうことかという、まあ天にも昇るようにですね嬉しくて嬉しくてどうにもならないとか、健康でピンピンして何でも出来るという時には、そんなこと思わない。で、人が怪我をして事故を起こしてもですね、人間何が起こるか分からないなりで過ぎちゃう。だけれども自分が、もしくは自分の親しい人がなったときには、それはすごく気になる事になるんですね。

ちょっと話を変えますけれども、納骨という行事が有りますが、がらっと変わりますが納骨もですね、まあ東本願寺の須彌壇収骨でもいいですけども。あるいは大谷祖廟というところで納骨されても結構ですが、それまでは「うちは門徒です」「門徒とは何処ですか」「本山は本願寺です」「東ですか西ですか?」「さあどっちだったでしょう」。言ってる人も、納骨をした場所が何処ですか?と聞かれて、「東本願寺」と言ったらですね、それ以降は東本願寺ということが頭に入ります。そうじゃありませんか。そういうことを何と云うか。そういうことを縁を頂いていると言うんです。縁を頂くとはそういうこと。だから顔も見なかったことないという先にも言いましたけれども、顔も見なかったことのない人の法事をするということはどういうことかという、今ずっと言ってきたように、病であったりそういった固執したこの姿ですね。法事なら法事というところで話し合う。元気なお母さんだったけど、あんな風になったら本当そばに近づきたくなかったのも事実だよな、正直のところとか。あるいは亡くなったら正直なもので、実家に足が向かなくなるとか、そう

いう話をするのがいわば法事なんです。そしてでも生まれて来てよかったねってこう言い合える場所がこの場所なんですね。そんなことを最近つくづくこう思うわけです。あの一、聞くと色々言いますけれども、聞き方というのはどうしてもこの自分の勝手なところから離れられない。離れられないけど聞くことによってそういうものに自分なんだと分かる。あるいは、病気をすることによって、やっぱり人は病になるんだなということが分かる。どんなにどんなに丈夫な人も亡くなってくなあとということが分かる。ここに来る前にですね、まあ大谷大学で学んだんですけども、親戚でもありますが細川先生という歴史の先生がおられたんですけども、亡くなられたというお話を聞いたんですね。親戚というのは、先生の奥さんと私の叔父の奥さんとが姉妹なんです。で今ね足腰がちょっと痛めていてですね、奥さん同士動けないんです。悲しいことだなと思いますけれども。その妹さんがですね、私の叔父のところへ電話をしてですね、「主人が亡くなったんです。私は動けません。お姉さんも動けませんよね。私は何かあったら金子のうちには行けないけれども、あなたも動けないから来なくていいよ」と言ってですね電話を切ったというのです。だけど何とかしていかなくちゃ、まあ行かれたかどうか分かりませんが。思うけどやっぱり動けない。何故かというところを両方年をとっているからです。細川先生が82歳でありますし、うちの叔父は今85になります。で、自分の事でやっとなんです。ですからとてもでないけど奥さんも行きたいけれども奥さんなんて連れて、奥さんなんか、て言いましたけど、連れて一緒に行ったらですね、雑踏の中どうなるか分からない。予想される。多少の思いもどっかにありますから迷惑かけちゃならないという思いもどっかにある。そうするとですね、やめとこうか後からまた行こうかとなるんです。これが現実なわけですよ。

そういう中にもあっても、でも生きてて良かったねということが自分の中に見つかるかどうか。難しいようで難しくないようで、易しいようで易しくないような、そんな問いかけのように私には思われるわけです。で、知識だけではだめということを実は先程言いましたけれども、まあどうしてもここは言わないなあと思って結果的に悪口になります。去年でしたけども、たまたまあるところで梅原猛という方の文章を読んでですね、「真宗というのは分かりにくい。そして歎異抄という書物を読んで、そこから親鸞を学ぶのはどうも難しい」という。無理ではなかろうかという話の中でですね、回向ということがですね、往相の回向と還相の回向、この説は近代人にとって分かりにくいと。かえってくる姿を回向とあらわす表現があるんですね。でこれをですね、梅原氏は、還相は幻想だと言っています。何でこういうことを言うのかなと。それもあつた種疑問に思いましたが、一方で非常に影響力あるなと思っておりました。今でもそれは間違いだなと。こう誰かちゃんとしてくれないかなと、自分の力でどうにもならないので何とかしたいと思ってもどうにもならないということがあったんで。最近になってですね、あの曾我量深という先生、あそこに写真がありますけれども、先生の本を読んでおりましたら、還相回向と往相回向のことが書いてある。どういうことが簡単に言うとね、一生懸命でないけれどもお念仏して毎日毎日お参りをしてですね、お念仏を

申しているとですね、阿弥陀様の方からこっちに呼びかけがあるようなそういうものを感じるとおっしゃる。私たちが南無阿弥陀仏と言うのは何か仏様にこう呼びかけをしてですね、弥陀をたのむというのは何か、弥陀に何かを頼むという感じですね、今日一日何とか無事にいられますようにとか頼むとか、そう思ってお参りすることもあるけれど、お参りしているうちに何か向こうから来るような、呼びかけをしてくれるというような。さっきア一消してしまっただけでも、その地獄に、そこにおられるということを感じさせるようなですね、ことが有るんだという文章に出会ったんですね。これだと思っただけですよ、これだと思っただけ。「聖人一流の御勸化のおもむきは」という御文もありますけれども、お念仏を申しているうちに向うの方からこう伝えられてこう呼びかけられている感じ。そこまでお念仏を申したり、聞法するというのをですね、勧められているんだろーとこう思っただけですよ。そのところを糸口にするとはですね、曾我先生の話は難しいって実際難しかった、今も難しいと思っただけでも、でもこの先生はね私にとってと思っただけだときにはすごくやさしいことを言うてくださるんです、いっぱい。先生、聞法とは何ですかと尋ねられると、「聞法とは聞くこと。繰り返し繰り返し聞くこと」もうそれ以上何もないということですね。「仏様はどこに居られますか」という質問をされた方に、「手を合わせる目の前に仏様が現れる」とこうおっしゃる。そういう声にですね、改めてこう耳を傾けたり、先生はこういう先生だったんだと思っただけでですね、やはりその先生がおっしゃるように、その往相還相という言葉は難しいんですけども、お念仏申すことで阿弥陀様からこう語られているようなことを感じるということがですね、実は大事なんだろうと思っただけです。私たちが時々成仏してるだろうかということをおっしゃるでですね、ちょっと深刻になることがあります。でも本願寺に言ったらね、その答えに似たような文があります。参拝接待所というところにあります。参拝接待所というところに行ったらね、「亡き人を案ずる私が、亡き人から案ぜられている」と書いてあります。そういう世界に私たちは居るんだということを教えていただいて、そしてそのことに対して感謝をするというのが報恩講なんです。で、こういう場所で、皆さんとこういう所で。皆さんはどうですか。お元気だったけれども年を取ってきたよね。まあだめだわ、去年のこと言われねえ年を取ってきたら。もうよいしょと言って立つ80のおじいさんですけども、なかなか立たれないんです終わっても。足しびれたんじゃないのと誰かが言うと、そうじゃないって言うんです。立つと思っただけでも立てないんだ、ひざを立ててよいしょとやらないと立てない、立てなくなっちゃった。去年はこんなことなかったけどな、年を取ったから。生まれて年を取ると歩く。その同じ1年なのに。昨年はずっと歩けたのに歩けない。これも同じ1年。そういう1年を自分の上に見ていくということをしてですね、そして生まれてきて色んな事で色んな人にも喜びを与えたかもしれないけど、迷惑をかけたかもしれないけど、だけれども生まれてきて良かったということをおんなの中に探していかねえければ、生まれてきたという甲斐がないじゃないですか。私は生まれてきて良かったと思っただけにしているという誤魔化しなんですけれども、生まれてきて良かったと思

うのはそういうことだと思っんですよ。生まれてきて良かったというのは、やっぱりお寺の住職になったことはそんなに良くてことは初めはそんなに思っていませんけれども、でも住職ということでですね色んな人に会うことも出来る。お寺さんというだけでですね、もう他の肩書き何にもいらなわけですよ。こういう所に来るときもね。だけれどもある方ですね、私に話に来ませんかというので、いいよその日は空いているよといっましたらですね、しばらくして電話かかってきて肩書きなんてしたらいいと言っんですよ。肩書きなんてないよ、最賢寺住職でいいよと。それだけではと言っので、それだけではと聞くと、前に来た人は何々大学の教授だとかねと言っんで、ならそういう人を呼びなさい、俺そんな所行かないよ。自分のあれじゃないの、自分がこういうところに勤めていて呼んでやるような気分にいるんじゃないの。呼んでやるという所は俺行ってやらないからって言ってやったんです。そういうものが世の中いっぱいある。だけれどもいつの間にか呼んでやったものが、それが当たり前になってくるとですね、何か自分が偉くなったような気分になる。自分を置いてしまう。だけれどもそうじゃない。何をやっても人間はこっち（煩悩？）から離れられない。私は、離れられない一生を生きられたのが親鸞聖人ではなかったか、というふうに思っっているわけですよ。田舎の人々にとって、愚痴極まりなきと言っますけれども、考えてみましたらそれは自分の姿であった、というふうにですね後々語られる場所があるわけですよ。こう思ったらそれが自分に返ってくるということ、仏法というのはいそれを教っていることをですね、改めて感じさせられている。

話がばらばらになりましたけれども、最後に私が師匠の様に思って尊敬しております宮城先生の言葉を紹介して、この会を終わりたいと思っます。「もし宗祖のご生涯に学ぶということがなければ、私たちの聞法も、その姿を問っ直す手掛りを失い、独善的なものになることが思われまます」。それからもう1つですね、「本来信仰ということ、何かを理解し分かったというのではなく、自分の生活を見出したということ。身の事実、生活の状況が如何にもあれ、その中で賜ったこの生活を喜び、賜った命を燃やし、生き切る勇気を情熱を賜ること」という風にして、賜る賜るといっのが出てきまますけれども、もうまさしくこれは自分の思であるものではなくてですね、賜りものであるということ、これを語っておられるわけで、これを聞いて私の言葉を権威づけるつもりは更々ありませんけれども、このこと、思われている、私たちの聞法の姿勢を問っ直す手掛りを失うというところが、実は浄土真宗に学ぶという本意ですね。一番大事なところ、これは聞っている、俺はやってる。俺は聞っている、俺はちゃんとやってる、何も悪いことはしてない、その姿勢を根本から問っ直すということですね。大事なことなんだろうと思っんです。政治家が失言を繰り返してですね、一生懸命言っ訳をしてる姿がテレビで出ておりましたけれども。だから言葉を気をつけなくちゃという人が沢山周りに居りますが、私もそう思っます。言葉に気をつける、当たり前なんですよ。当たり前のことをやっていても、まだ人を傷つけるということ、ね、分からなくちゃならない。そこが聞法のポイントだというふうに思っます。ちょっとくどくなりましたけれども、今年もご縁有難うございました。